

Bodhibhadra の *Samādhisambhāraparivarta* について

望 月 海 慧

はじめに

チベット大蔵経のテンギルの「中観部」には三種の *Samādhisambhāraparivarta* が収められている。一つは今回考察した Bodhibhadra によるものであり、一つが *Kṛṣṇapāda* によるものであり¹⁾、最後が *Dīpaṃkaraśrjñāna* (Atiśa, 982-1054) によるものである。このうち、*Kṛṣṇapāda* によるもの²⁾ は、七項目からなる七つの支分³⁾ を列挙しただけのスタイルで書かれたものである。その構成や内容については Bodhibhadra の注釈に類似しており、同論を意識した上で本論が著されたように思われる。しかしながら経論などの引用は見られず、比較的簡単な内容の小片テキストである。前二論の著者を自らの師とする *Dīpaṃkaraśrjñāna* によるもの⁴⁾ は、最後に著されたものであろう。その内容は、僅か 45 パーダの偈の中に三昧の支分とその対治とをまとめたものである。その項目は Bodhibhadra のものと一致するものがあり、それを読んだ上で著されたものであると推定できる。本稿ではこれらの著書に影響を与えたであろう Bodhibhadra のテキストについて考察を行う。

Bodhibhadra の著作

Bodhibhadra の生涯に関する詳しい情報を、現時点で得ることはできない。Śāntarakṣita のテキストに対する注釈書を著しているのも、彼より後の時代に生存した者である。また *Dīpaṃkaraśrjñāna* は、彼のことを「現在の私の師⁵⁾」と述べていることから年長の同時代者である可能性がある⁶⁾。

チベット大蔵経には Bodhibhadra の著作として、1) *Yogalakṣaṇasatya*⁷⁾、2) *Jñānasārasamuccayanibandhana*⁸⁾、3) *Samādhisambhāraparivarta*⁹⁾、4) *Bodhisattvasaṃvaravidhi*¹⁰⁾、5) *Bodhisattvasaṃvaraviṃśakapāṇjikā*¹¹⁾ が収められている。唯識部に収められた最後のものを除くと、いずれもが中観部に収められているが、最初のものについては、タントラのセクションにも収められている。二番目のもの

は Āryadeva に帰されるテキストに対する注釈書であり、最後のものは Candragomin の *Bodhisattvasaṃvaraviṃśaka* および Śāntarakṣita の同注に対する複注である。これらの注釈書は、彼自身のオリジナル・テキストである残りの三論よりも大部なテキストである。またそのオリジナル・テキストがチベット大蔵経の中観部に収められており、また Dīpaṃkaraśrjñāna が彼を中観論者とすることから、チベット大蔵経が編纂された時点において、彼の思想的立場は中観論者と認識されていたといえる。

Samādhisambhāraparivarta の内容

本テキストの主題は、三昧を行う上での必要事項をまとめたものであり、瞑想のための準備段階とその実践が主要テーマとなっている。テキスト全体の構成は、その冒頭に述べられる、

そして三昧の資糧の支分は九種である。すなわち、(1) 捨てるべきものと、(2) 前行と、(3) 退けるべきことと、(4) 苦悩を断じることと、(5) 意を生じさせることと、(6) 功德を記憶すべきことと、(7) 精進すべきことと、(8) 結びつけるべきことと、(9) 住する方法と言われるものである。

という記述に基づいて、三昧の資糧を九つのセクションに分類したものである。そこで論じられる内容と聖典根拠として引用されるテキストは次の通りである。

0. 概略 (D. Ki 79bl)

1. 捨てるべきも (D. 80a4)

1.1 魔 (D. 80a4) : (1) 蓮華の鬘をもつ欲天、(2) 四世間守護、(3) 魔種の餓鬼

1.2 魔の業 (D. 80a5)

1.2.1 欲天の業 (D. 80a5) : (1) 自慢すること、(2) 障害となること、(3) 普く障害となること、(4) 沈めること、(5) 無心にすること

1.2.2 四世間守護の業 (D. 80a7) : (1) 論争させること、(2) 散乱させること、(3) さらに執着させること、(4) 想を顛倒させること

1.2.3 魔種の餓鬼の業 (D. 80b7) : (1) 夢中で恐怖を起こさせること、(2) 禪定を中断させること、(3) 禪定中に大声で叫ばせること : *Krodhaviṣayakalpagaḥyatantra*

1.3 魔の業は精進から生じる (D. 81a3) : *Manjuśrīvikurvāṇaparivartasūtra*

1.4 魔の業を退ける (D. 81a5) : **Devaputraratnottamaparipṛcchā*

1.5 邪魔 (D. 81a7) : (1) 天子の魔、(2) それ以外 : *Subāhuparipṛcchāsūtra*

1.6 邪魔を退ける方法 (D. 81b1) : *Vajraśekharamahāguhyayogatantra*

2. 前行 (D. 81b3)

聞の智慧 : *Daśabhūmikasūtra*, *Gaṇḍavyūhasūtra*, *Prātimokṣasūtra*

3. 退けるべきこと (D. 82a1)

多聞から退くこと→有情利益のための神通を得る : *Daśabhūmikasūtra*, *Adyāśayasandanasūtra*

4. 苦悩を断じること (D. 82b1)

戲論を捨てること : *Mahāvīyānasūtrāṃkāra* 11.60, *Gaṇḍavyūhasūtra*, *Dohākośa* 44, **Uttarasamvara*, *Vajroṣṇīṣa*, *Subāhupariprcchāsūtra*, *Abhidharmakośakārikā* 7.26c

5. 意を生じさせること (D. 83a6)

無執着 : *Bodhicaryāvatāra* 8.4cd, 7-8, 17, 20-23, *Subāhupariprcchāsūtra*, *Suḥr̥llekha* 58, 66, *Anityatāsūtra*

6. 功德を記憶すべきこと (D. 84b6)

三昧の功德の記憶 : *Śiṣyalekha* 68-70, 72¹²⁾, *Bodhicaryāvatāra* 8.26-30

7. 精進すべきこと (D. 85b3)

功德の対治を意識することで功德を広げること : *Bodhicaryāvatāra* 7.1, 2.34, *Suḥr̥llekha* 55, 104, *Śiṣyalekha* 65-67, *Saptāṅga*, *Dohākośa*

8. 結びつけるべきこと (D. 86a6)

止と観, 方便と智慧の結合 : *Bodhicaryāvatāra* 8.4, *Vimalakīrtinirdeśasūtra*, *Gayāśīrṣasūtra*, *Gaṇḍavyūhasūtra*, *Ḍākinīvajrapanjarahātāntrarājākalpa*, *Bodhicittavivaraṇa*, *Madhyamakāṃkāra* 83, *Mahāvairocanaḥśambodhivikurvatyadhiṣṭānavaipulyasūtra*

9. 住する方法 (D. 87a7)

9.1 場所に相応しい食物と行道に相応しい衣服と友人

9.1.1 相応しい場所 (D. 87a7) : *Subāhupariprcchāsūtra*

9.1.2 相応しい食事 (D. 87b5) : *Suḥr̥llekha* 38, **Pūrṇapariprcchā*, *Subāhupariprcchāsūtra*, *Susiddhikaramahātāntrasādhanopāyikapaṭaḥ*

9.1.3 相応しい友人 (D. 88b2) : *Subāhupariprcchāsūtra*

9.1.4 相応しい衣服 (D. 88b6) : *Subāhupariprcchāsūtra*, *Susiddhikaramahātāntrasādhanopāyikapaṭaḥ*

9.1.5 随順する行道 (D. 89a1)

9.1.5.1 よく住すること (D. 89a2) : *Gaṇḍavyūhasūtra*, *Bodhicaryāvatāra* 5.18cd, 22, *Sahajasiddhi*

9.1.5.2 苦を制圧すること (D. 89a5) : *Bodhicaryāvatāra* 8.40, *Subāhupariprcchāsūtra*, *Krodhaviṣayakalpagaḥyatantra*, *Guhyasamājatantra*

9.1.5.3 特別な行道 (D. 89b3) : **Krodharājaśaṇmukhatantra*, *Subāhupariprcchāsūtra*, *Krodhaviṣayakalpagaḥyatantra*

9.2 ヨーガによる心の平静 (D. 89b7) : *Madhyāntavibhaṅga* 4.4-5

9.3 止 (D. 90a3)

9.3.1 内部を見ることにより得られるもの (D. 90a4)

9.3.1.1 身体を対象とすること (D. 90a4) : (1) 天の相, (2) 不浄, (3) 特殊な相

9.3.1.2 身体に依存するもの (D. 90a5) : (1) 呼吸, (2) 微細な相, (3) 精液, (4) 光線の支分, (5) 喜楽

9.3.2 外部に見られるものを対象とすること (D. 90a6)

9.3.2.1 特殊なもの (D. 90a6) : (1) 身体, (2) 言葉

9.3.2.2 共通なもの

9.4 観 (D. 90b1)

9.5 無分別智 (D. 90b4) : *Kāśyapaparivarta* 69, *Bhavasamkrāntiparikathā*, *Bodhicittavivaraṇa* 36ab

10. まとめ (D. 91a4)

Dīpaṃkaraśrījñāna が言及する *Samādhisambhāraparivarta*

Bodhibhadra を自らの師の一人であると宣言する Dīpaṃkaraśrījñāna は自らの著書においてしばしば Bodhibhadra とその著書に言及する¹³⁾。 *Bodhipathapradīpa* 161-162 では、「それ故に *Samādhisambhāraparivarta* に説かれた支分によく出ており」と述べられており同論に説かれる九つの支分に言及し、同じく 181-184 は、その自注の *Bodhimārgadīpapañjikā* において Bodhibhadra の言葉とされている。この大部の注釈書では、Bodhibhadra の *Bodhisattvasaṃvaraviṃśakapañjikā*¹⁴⁾ と並んで *Samādhisambhāraparivarta* が 11 度¹⁵⁾ 引用されている¹⁶⁾。後者の引用については、神通を説くセクションにおいて *Adyāśayasancodanasūtra* の引用に続いて同論が引用されている。引き続いて止を説く偈に対する注釈箇所においても、Bodhibhadra が説いた九支分に言及し、同論が引用されている。同論の引用だけでなく、*Dohakośa* や *Madhyāntavibhaṅga* などの引用文献なども Bodhibhadra の本論と重なっている。これらのことから *Bodhipathapradīpa* とその自注における神通から止へのコンテクストは、その引用経論も含めて、Bodhibhadra の *Samādhisambhāraparivarta* に基づいて著されたことは明らかである。

その他にも *Bodhisattvādharmaśāstra* 171¹⁷⁾ では、前述の本論の九支分が言及されている。また *Mahāyānapathasādhanaśāstra* 319 も、*Samādhisambhāraparivarta* を学ぶべきであると説いている¹⁸⁾。これらのことから、本論は Dīpaṃkaraśrījñāna にとって重要なテキストの一つであったことがわかる。

まとめ

本テキストで述べられるべき内容は、その冒頭に述べられる三昧資糧に対する九つの分類につきる。その後の部分は、それぞれの項目に対する経証を提示しただけのものである。そこで引用される経論の観点から、本論を考えてみる。經典の引用は、14度の *Subāhupariṣcchāsūtra* を筆頭に、3度の *Krodhavijayakalpa-guhyatantra* などの密教經典が多いことが目立つ。ただし、その引用内容は密教独特の教義を述べたものを引用しているわけでもない。大乘經典に関しては、4度の *Gaṇḍavyūhasūtra* と2度の *Daśabhūmikasūtra* が複数回引用されている。論書では、Śāntideva の *Bodhicaryāvatāra* が13度引用され、最も多い。この他には、Nāgārjuna¹⁹⁾ の *Suhṛllekha* が5度、Candragomin²⁰⁾ の *Śiṣyalekha* が2度、Saraha の *Do-hākośa* が3度引用されている。このようなことから、彼は中観の教義の上にタントラの実践を取り入れようとしたというような印象が得られる。少なくとも *Bodhibhadra* は、この両者が並立するものであると認識していたように思える。

しかしながら彼が顕教では中観思想の立場に立っていた断定することには、慎重な判断を要する。ここで引用される中観論書に関しては、その思想的立場を代表するものは引用されておらず、むしろ止のコンテキストで重要な役割を果たしているのは、唯識思想の *Madhyāntavibhaṅga* であり、*Mahāyānasūtrālaṃkāra* の引用も見られる。このようなことから、*Bodhibhadra* の思想的立場は、やはり *Dīpaṃkaraśrījñāna* と同様に、瑜伽行の修行体系の上に中観思想を成立させ、Nāgārjuna と *Asaṅga* を両立させるものであったように思える。この背後には、タントラの実践も否定しない立場もあろうが、このような判断は、彼の他の著作内容を検討した上ですべきである。

1) 以上の2論については、Tsering Dolkar, *Ācārya Bodhibhadra-Kṛṣṇapāda-Viracitau Samādhisambhāraparivartau*, Sarnath 2004 にチベット語校訂テキストとヒンディー語訳が添えられている。

2) Tr. by Nag po shabs, Chos kyi shes rab. Tib. D. No.3925, Ki 91a7-92b7; P. No.5320, A 100a8-102a6.

3) これらは、(1) 先行する支分、(2) 高尚な在り方を損なわない支分、(3) 中断を捨てる支分、(4) 記憶を思い出す支分、(5) 苦悩を断じる支分、(6) 明らかになる支分、(7) 身体を守り損害を取り除く支分に、四項目からなる (8) 増補の支分が加えられたものである。

- 4) Tr. by Dīpaṃkaraśrījñāna, Shākya blo gros. Tib. D. No.2460, Zi 134b6-135a6, No.4485, 37b2-38a3; P. No.3288, Tshi 169a2-b5, No.5398, Gi 46b8-47b2. 和訳については、学会発表時の配布資料を参照.
- 5) *Bodhimārgadīpapaṇjikā*, Tib. No.3948, Khi 250b2. また同論 (Khi 280a4-6) では、師 gSer gling pa と Shān ti pa を Asaṅga の教えを相続した唯識論者とし、師 Bodhibhadra を中観論者とする. このことを考えると、Dīpaṃkaraśrījñāna の思想的パラダイムを唯識から中観に変換させたのは Bodhibhadra である可能性がある. ただし、両者の中観思想というものがあるのかどうかはまた別の問題である.
- 6) Katsumi Mimaki, *La Réfutation Bouddhique de la Permanence des Choses et la Preuve de la Momentanéité des Choses*. Paris. 1976, p.7 は、[c. 11s.] とし、松本史朗「Bodhibhadra」(三枝充恵編『インド仏教人名辞典』法蔵館, 1987) pp.235-236 は「1000 年ころ」とする.
- 7) Tib. D. No.2458, Zi 132b5-134a3; P. No.3286, Tshi 166b1-168a3, No.5450, Gi 186b1-188a1.
- 8) Tr. by Śāntibhadra and Klu'i rgyal mtshan. Tib. D. No.3852, Tsha 28a3-45b4; P. No.5252, Tsha 31a3-53a3; Mimaki 1976, pp.190-207.
- 9) Tr. by Vīryacandra and Chos kyi shes rab. Tib. D. No.3924, Ki 76b7-91a6; P. No.5319, A 87a-100a8, No.5444, Gi 166b2-179a4.
- 10) Tr. by Sunāyaśrīmitra, Dharma grags. Tib. D. No.3967, Gi 239a4-241b6, No.4491, 43b5-46a7; P. No.5362, Khi 276b6-280a4, No.5404, Gi 54a5-57b1.
- 11) Tr. by Kṣelakagana, Byang chub shes rab. Tib. D. No.4083, Hi 154b3-217b5; P. No.5584, I 213a2-251a2; 藤田光寛「Byaṅ chub bzañ po 著『菩薩律儀儀軌』について」『密教文化』141, 1981, pp.100-87, 同「Candragomin 著〈菩薩律儀二十〉とその注釈書 2 種 校訂テキスト」『高野山大学密教文化研究所紀要』15, pp.(1)-(131).
- 12) Michael Hahn, *Invitation to Enlightenment*, Dharma Publishing, Berkeley, 1999, pp.96-101 によると、第 71 偈はチベット語訳のテキストのみで、サンスクリットには欠けている. この偈はこの引用でも欠けており、本来は存在しなかったものである可能性がある.
- 13) 両者の関係については拙稿「ボーディパドラとアティシャ」(日本宗教学会第 64 回学術大会配布資料, 2005 年 9 月 9-11 日, 関西大学)を参照.
- 14) *Bodhimārgadīpapaṇjikā*. Tib. D. No.3948. Khi 258a7, 259b7, 265b6, 266a6, 267a1, 267a2, 268b2, 271b3 の 8 箇所である. 引用される箇所は、*Bodhisattvasamvaravimśakapaṇjikā*, D. No.4083, Hi 186b4-6, 186b2-4, 217a3-b4, 202a5-6, 194b6, 194b7, 186a6-b1, 217a4-b2 となる.
- 15) *Bodhimārgadīpapaṇjikā*. Tib. D. No.3948. Khi 273b6, 273b7, 273b7, 274b4-5, 274b6-7, 276b7-275a1, 275a1-3, 275a7-b4b, 275b4-5, 275b5-6, 275b6-7 の 11 箇所である. 引用される箇所は、*Samādhisambhāraparivarta*, D. Ki 82a1-2, 82a7-b1, 84a2-3, 80a3-4, 87a7-b1, 89b3, 90a1-3, 90a3-7, 90b5, 91a3-4, 90a7-b1 となる.
- 16) この他に Bodhibhadra の名前の言及については、gSer gling pa との併記 (Tib. D. No.3948. Khi 242b6, 250b2), 中観の教義の継承者として (Khi 280a6, 282a3, 283a7) のものなどがある.
- 17) Tib. D. No.3952 (=4477), Khi 297a. 拙稿「ディーパンカラシュリージュニャーナの

- 『入菩薩初学道灯説示』について」(日本宗教学会第 58 回学術大会配布資料) 1999, p.8.
- 18) 拙稿「アティーシャに帰される二つの『大乘道成就撰集』について」(日本宗教学会第 62 回学術大会配布資料) 2003, p.26. ただしこの句は、一般名詞として「三昧の資糧を学ぶべき」とも読める.
- 19) 彼の他のテキストの引用は、*Bodhicittavivaraṇa* が 2 度、*Bhavasamkrāntiparikathā* が 1 度の 3 度見られる. しかしながら中観思想を代表する彼の主要テキストは言及されない.
- 20) 前述のように、Bodhibhadra は彼の *Bodhisattvasaṃvaraviṃśaka* に対する注釈を著しており、彼にとって Candragomin は重要な人物であったことがわかる. また本論では、同論に注釈を著した Śantarakṣita の *Madhyamakālaṃkāra* も 1 度引用されている.
- (本研究は平成 14-16 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) の研究成果の一部である)

〈キーワード〉 Bodhibhadra, Dīpaṃkaraśrījñāna, Atiśa, *Samādhisambhāraparivarta*
(身延山大学助教授)

新刊紹介

佐藤 裕之

『アドヴァイタ認識論の研究』

A5 版・560 頁・定価 20,000 円

山喜房佛書林・2005 年 2 月

scription is that it *does* refer, though not directly, to Amida-buddha — according to his opinion, neither Amitābha nor Amitāyus but Amṛda (Amṛta) — himself.

185. On the *Samādhisambhāraparivarta* of Bodhibhadra

Kaie MOCHIZUKI

There are three texts named *Samādhisambhāraparivarta* in the Mādhyamika section of the Tibetan Tanjur. The largest is written by Bodhibhadra, the second is by Kṛṣṇapāda and the last smallest is by Dīpaṃkaraśrījñāna.

In the text of Bodhibhadra (= SSP), he says in its beginning that there are nine accumulations for meditation, namely: 1) renunciation, 2) preparation, 3) avoidance, 4) suppression of anxiety, 5) dissatisfaction with the world, 6) mindfulness of merits, 7) efforts, 8) integrating, 9) means of staying.

Dīpaṃkaraśrījñāna, who is said to be a student of the Bodhibhadra, refers to SSP in his texts many times. Comparing the contents of *Bodhimārgadīpa-panjikā* with SSP, it will be clear that Dīpaṃkaraśrījñāna wrote the section of meditation in the *Bodhipathapradīpa* and its self-commentary on the basis of SSP.

186. “Deva” in the Paritta Ritual

Takeshi KAMEYAMA

In the paritta ritual performed in contemporary Theravada Buddhism, we can recognize a number of devas, who are to be found in the canonical Pāli literature. For example, the monks who are responsible for the paritta ritual offer an invocation to devas, saying “atra āgacchantu devatā (gods, come here!)”.

The main paritta scriptures are the *Maṅgalasutta*, *Ratanasutta*, *Kalaṇiyamettasutta*, *Dhammacakkappavattanasutta*, and *Mahāsamayasutta*, within which we find influences on devas reflected repeatedly. At the end of the paritta ritual, monks say “gacchantu devatāgatā (Divine ones, go away!)”.